

Coda school '22 秋学期

研究論文

日本の伝統的な建築が城郭建築から受けた影響について

—武家社会の観点からの考察—

氏 名 志田 樹陽

提 出 日 2023 年 01 月 18 日

目次

1. 序論
 - 1.1. 研究テーマと意義
 - 1.2. 問題意識と目的
 - 1.3. 方法
2. 本論
 - 2.1. 城郭建築の変化について
 - 2.2. 民家系建築の変化について
 - 2.3. 武家社会の変化について
3. 結論
 - 3.1. 総括
 - 3.2. 残された課題と今後の展望
4. 参考文献

1. 序論

1.1. 研究テーマと意義

本稿では、日本の伝統的な建築が城郭建築から受けた影響を主題とし、武家社会の観点から考察する。

本研究は、当時の建築技術の歴史的な発展の変遷を明らかにすることで、これからの技術の発展に必要なことの思索につながると考えられる。実際に、建造から 1300 年以上一度も倒れていない法隆寺五重塔で採用されている「心柱制振」という免震技術は、東京スカイツリーでも採用され、地震の揺れを小さくすることができるようになっている。¹このように、建築物の歴史について考察することは、今日の建築技術への応用も期待できると考える。

1.2. 問題意識と目的

現在このテーマの研究では、城郭建築は民家系の技術に何かしらの影響を与え、またここではプレファブシステムが行われていたということが分かっている。先行研究として、増田一眞の『日本の木造架構史 第 8 部 近世の城郭・藩校』には、以下のように記されている。

¹ Web Japan「1300 年前の技術が支える東京スカイツリー®」『キッズ・ウェブ・ジャパン』, <https://web-japan.org/kidswb/ja/hitech/16/skytree.html>, 2023 年 1 月 15 日閲覧)

城郭建築は社寺建築の系統ではなく、民家系の技術を集大成したものである。それは、何よりも迅速かつ堅固であることが主眼であるから、現地とは別の場所で正確に刻みを施し、現地では一気に組み上げる、徹底したプレファブシステムでなければならなかった。（増田一眞, 2018, p.2）

しかし、増田の論述だけでは、城郭建築でプレファブシステムを徹底するようになった時期、理由や城郭建築のどのような工夫がどのように影響を与えたのかが十分に検討されていないため、本稿ではこれを明らかにする。

以上の背景から、本研究のリサーチクエスションは〈民家系の建築技術は、安土桃山時代の城郭建築の加工技術向上に影響を受けたのではないか？—応仁の乱期（1400 年代後半）と江戸時代初期（1600 年代前半）の民間の建築技術の比較から〉と置く。この問いは、安土桃山時代に城郭建築が民家系の建築に影響を受けたかを、その前後の変化で確かめる目的で、決定した。また、応仁の乱期は戦乱が続いて臨戦的な城郭が、江戸時代初期は「慶長の築城ラッシュ」と呼ばれるほどの多くの城郭がそれぞれ築かれていたために、多くの資料を比較することができると考え選定した。

また研究者として、私は日本の城郭などの昔からの建築が好きで、日本城郭検定 1 級を保持しており、その知識から既存の中世・近世の建築研究に踏み込んだ部分までメスを入れて研究することができると期待している。

1.3. 方法

本稿では、民家系の建築技術が城郭建築の技術に影響を受けたのは安土桃山時代なのかどうか、またどのような工夫があったのか明らかにするため、その前後の応仁の乱期（1400 年代後半）と江戸時代初期（1600 年代前半）の民家系の建築、城郭建築を比較したり、当時の文献を閲読したりして調査を行う。

本稿では、以下の順序で議論を進める。第一に、調査で得られた結果について述べる。第二に、結果を受けて考察を述べる。

2. 本論

2.1. 城郭建築の変化について

本章では、「城郭建築は、応仁の乱期（1400 年代後半）から江戸時代初期（1600 年代前半）の間に变化したのではないか」という仮説を立てて検証する。

結論は、城郭建築は、応仁の乱期（1400 年代後半）から江戸時代初期（1600 年代前半）の間に变化したと言える。

根拠として、変化した点が大きく3つあげられる。一つ目は、「やぐら建築」の技術が発達した点である。「やぐら建築」とは、城郭に建造される、敵の偵察や射撃のための高い建物のことである（図1）。



図1 逆井城の井楼やぐら

（埼玉県比企郡嵐山町「嵐山町 web 博物誌」，

http://www.ranhaku.com/web05/c2/1_07saka_yagura.html，2023年1月11日閲覧）

応仁の乱期には、京都市中に井楼（盆踊りの太鼓櫓に似た構造のやぐら）があちこちに築かれ、一般化していた。井楼については、『築城記』に、井楼について、次のように記されている。

先スソバカリに柱ヲふんばらせ、ツヨク立也、一重あぐるハ、サマを下にて切て面ノ方ヲ先トク上ベキ也、一重の時も上へあげかさぬるやうに、柱の心えをしてあぐるなり。（先のあたりに柱を踏ん張らせ、強く立てる。一重仕上げるには、狭間を下で切り、面の方をすぐに上げなければならない。一重の時も上へ上げ重ねるように、柱の中心を押して上げる。）

上記から、「重ねあがる組み立て式」であったとわかる。『碧山日録』には、応仁の乱のさなかの応仁2年4月に東軍の細川軍が10余丈(20～30m)以上の井楼をあげたという内容の記載がある。戦時は、出来るだけ遠くを見張るために、技術の限り井楼を高くする必要があったはずであり、従って10余丈をこえる高さは技術的に難しかったのではないかと考察できる。一方、江戸時代初期にはすでに「やぐら建築」が発達して天守という種類も生まれていた。これは、鉄砲の普及によって、敵の矢玉を防ぐ必要があるため厚い土壁で囲まれていた。慶長末～元和年間以降、内部に多くの通し柱を林立させていて、工期の短い層塔型天守という天守建築が普及し、応仁の乱期よりも発達した高度な木造建築が行われていた。通し柱とは、2階以上の木造建築の柱のうち、一本で土台から軒まで通って

いる柱のこと²である（図2）。やぐら建築が高層化したのは、高い場所から敵の動きを見下ろしたり、重力を味方に上から攻撃したり、新しい領地を統治することになっても在地の民に権力を示したりするためである。層塔型天守の代表格である寛永期の江戸城天守は、142尺(44.8m)と世界最大級の木造建築であった（図3）。よって、「やぐら建築」はこの間に「重ねあげる組み立て式」から通し柱を多用するようになったことで、より高くすることが可能になったといえる。

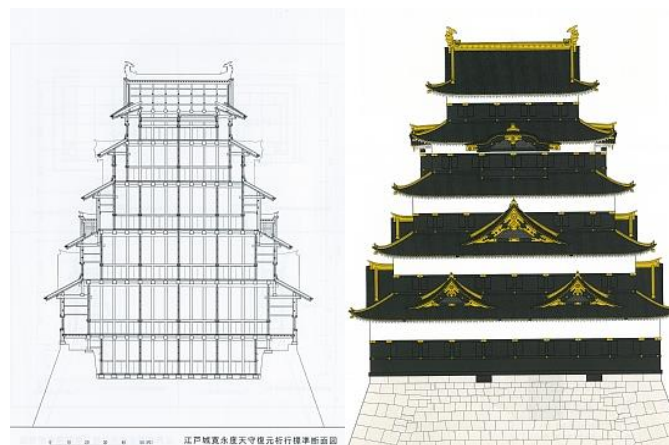


図2・図3 江戸城の寛永期天守

（「江戸城寛永度天守復元調査報告書記念報告会。」http://arcadia.cocolog-nifty.com/nikko81_fsi/2015/11/post-a81c.html, 2023年1月11日閲覧）

二つ目は、御殿などの殿舎建築の様式が主殿建築から書院建築になった点である。応仁の乱期、城、城館では主殿建築という造りが一般的であった。これは、室町時代に築かれた小金城（松戸市）などの発掘調査で発見されている。主殿建築の特徴は、①平面は南北に区画され、南半分が接客、儀式（行事）の場に宛てられ、中心の室が「九間」で構成される。②対面をするときは、主人も客も同じ部屋に座る。③接客を行う対面の座敷に、押板・床・帳台構・付書院・違棚が設けられる、などにまとめられる（図4）。

² LIXIL「通し柱(とうしばしら)とは」『リフォーム』,
[https://www.lxil.co.jp/reform/yougo/kouhou/mokuzou/24.htm#:~:text=%E3%82%89\)%E3%81%A8%E3%81%AF-,%E9%80%9A%E3%81%97%E6%9F%B1\(%E3%81%A8%E3%81%86%E3%81%97%E3%81%B0%E3%81%97%E3%82%89\)%E3%81%A8%E3%81%AF,%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%82%8B%E6%9F%B1%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82](https://www.lxil.co.jp/reform/yougo/kouhou/mokuzou/24.htm#:~:text=%E3%82%89)%E3%81%A8%E3%81%AF-,%E9%80%9A%E3%81%97%E6%9F%B1(%E3%81%A8%E3%81%86%E3%81%97%E3%81%B0%E3%81%97%E3%82%89)%E3%81%A8%E3%81%AF,%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%82%8B%E6%9F%B1%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82), 2023年1月15日閲覧）

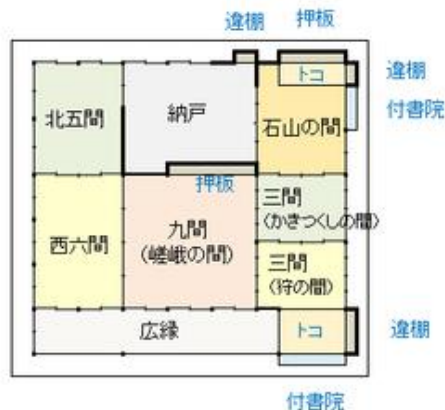


図4 東山殿の会所復元図（「中世の寝殿造」

<https://www.wikiwand.com/ja/%E4%B8%AD%E4%B8%96%E3%81%AE%E5%AF%9D%E6%AE%BF%E9%80%A0>, 2023 年 1 月 11 日閲覧)

一方、1626 年に現在の姿になった二条城二の丸御殿の大広間一の間や黒書院では、帳台構・付書院・違棚に加えて床の間がみられる（図5）。



図5 二条城二の丸御殿の黒書院

（世界遺産 元離宮二条城「二条城の歴史・見どころ～国宝・二の丸御殿」<https://nijo-jocastle.city.kyoto.lg.jp/introduction/highlights/ninomaru/>, 2023 年 1 月 11 日閲覧)

床の間は、三具足と称する、香炉・花瓶・燭台が並べられ、仏画や軸装画が掛けられる場所で、この二条城二の丸御殿の大広間一の間や黒書院のような殿舎建築を書院建築という。図5のような豪華さは、主人の威厳を高めるためのものだった。また、二条城二の丸御殿を見ると、図4に比べ間取りが複雑であることもいえる（図6）。

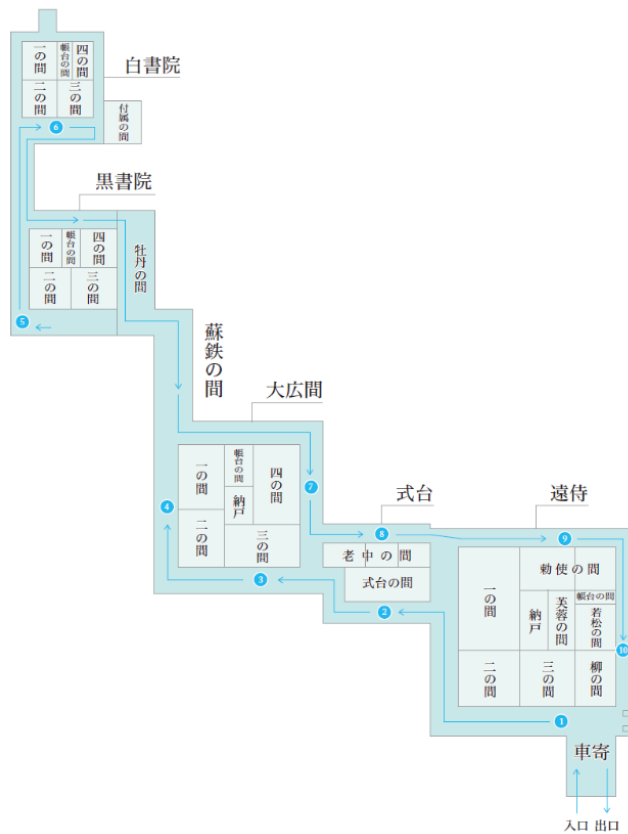


図6 二条城二の丸御殿の平面図

(世界遺産 元離宮二条城「二条城の歴史・見どころ～国宝・二の丸御殿」<https://nijojocastle.city.kyoto.lg.jp/introduction/highlights/ninomaru/>, 2023年1月11日閲覧)

加えて、大広間を見ると、上段の間に主人、下段の間に客という風に2つの部屋を使った対面が行われていたという事もわかる(図7)。



図7 二条城二の丸御殿の大広間

(「歴史の舞台〈大広間〉の対面所前期：将軍が見た二の間」<https://atoato.net/events/7828>, 2023年1月15日閲覧)

また、多くの御殿では上段の間と下段の間に、細かい鉄格子を入れた「欄間」があった。欄間は、主人と客(君主と臣下)の身分差を表す結界のような役割をしていた。よって、殿舎建築ではこの間に床の間や間取りが変化したといえる。

三つ目は、築城を担う人々が築城者の家臣・被官・一般農民から、職人に分業化された点である。応仁の乱期は、築城者・その家臣・被官が領内の一般農民を徴発して、用材の調達、構築、維持管理を郷村ごとに割り当てていた。一方、江戸時代初期には、それに加えて築城の際、職種別の職人集団で分業を行っていた。例として、大鋸引という職人によって木割りされた材木は、番匠・大工職人により建築になる部分加工、組み立てが行われた。上記の方法は、プレファブシステム（建物の柱や梁、屋根・壁などのさまざまな部材をあらかじめ工場で製造し、建築現場でそれらを組み立てて、建物を完成させる建築方法のこと³⁾）に当てはまる。よって、この間に分業という方法を用いてプレファブシステムが行われるようになったといえ、その根底には築城を担う人々の変化があると考えられる。

以上から、城郭建築は、「高層建築の技術」「殿舎建築の様式」「建設の工夫」の大きく3つの点で応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したと言える。

2.2. 民家系建築の変化について

本章では、「民家系の建築は、応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したのではないか」という仮説を立てて検証する。

結論は、民家系の建築は、応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したと言える。

根拠として、変化した点が大きく2つあげられる。一つ目は、京都の大半の町屋の階数が、1階から2階になった点である。応仁の乱後の京の様子を描いた「洛中洛外図屏風 歴博甲本」を見ると、このころの京の町屋は多くが一階建てで、二階建ての町屋は1つの街区に多くても1~2軒であったとわかる(図8)。

³⁾ 日成ビルド工業「プレハブ建築とは」『はじめてのシステム建築・プレハブハウス』
https://www.nisseibuild.co.jp/support/merit_prefab/#:~:text=%E3%80%8C%E3%83%97%E3%83%AC%E3%83%8F%E3%83%96%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%84%E3%81%86%E8%A8%80%E8%91%89%E3%81%AF%E3%80%81,%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%82%92%E7%A4%BA%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82,2023年1月15日閲覧)



図8 洛中洛外図屏風 歴博甲本 左隻に描かれた町屋

(大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館「洛中洛外図屏風(歴博甲本) 【重要文化財】 [16世紀前期]」

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_1.html ,2023年1月15日閲覧)

一方、1615年頃のものとする「洛中洛外図屏風 舟木本」を見ると、町屋の多くが二階建てになっていて、場所によってはそれが立ち並んでいるということが分かる(図9)。



図9 洛中洛外図屏風 舟木本 左隻に描かれた町屋

(「洛中洛外図屏風(舟木本) らくちゅうらくがいずびょうぶ ふなきぼん」

https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100318&content_part_id=001&content_pict_id=044&langId=ja&webView=null ,2023年1月15日閲覧)

また、1662 年建造の、奈良県橿原市今井町にある二階建て町屋の豊田家の断面図を見ると、通し柱が多用されているということも分かる（図 10・図 11）。

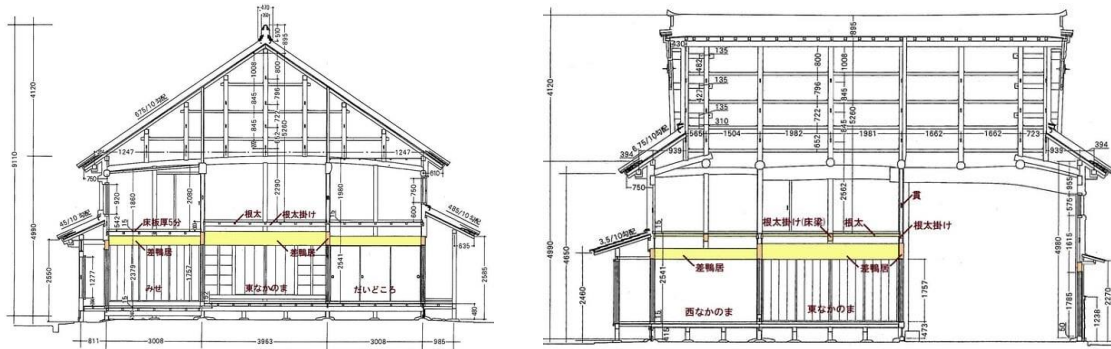


図 10・11 豊田家の断面図

（「建築をめぐる話 故下山眞司 第 V 章 二階建ての歴史 江戸時代・明治」

<https://blog.goo.ne.jp/ar-ss0107/e/8d6970c2562697ef9c6ea2a3f3296d1d>, 2023 年 1 月 15 日閲覧）

よって町屋のほとんどはこの間に、一階建てのものから、通し柱を使った二階建てに変化したと言える。

二つ目は、農民の住居の様式が二室住居から広間型住居になった点である。応仁の乱期は、集落にある農民の住居は二室住居と呼ばれる様式だった。二室住居とは、土間と床座の二室のみで構成される住居のことである（図 12）。



図 12 洛中洛外図屏風 歴博甲本 左隻に描かれた町屋

（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館「洛中洛外図屏風（歴博甲本） 【重要文化財】 [16 世紀前期]」

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_1.html ,2023 年 1 月 15 日閲覧)

一方、江戸時代には、広間型住居と呼ばれる農民の住居が生まれた。広間型住居とは、炊事や農作業をする土間と、床座を広くして奥に間仕切りで用途別の部屋を設けた広間で構成される住居のことである。よって、農民の住居ではこの間に様式が変化したといえる。

以上から、民家系の建築は、「町屋の階数」「農民住居の床座の様式」の大きく2つの点で応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したと言える。

2.3. 武家社会の変化について

本章では、「武家社会は、応仁の乱(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したのではないか」という仮説を立てて検証する。

結論は、武家社会は、応仁の乱(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したと言える。

根拠として、中村吉治『武家の歴史』を参考に变化した点が大きく4つあげられる。

一つ目は、大名のあり方が変化した点である。応仁の乱期に発生した戦国大名は領国の支配者としての性格を持っていて、領国拡大のために他国と戦って成長していた。一方、江戸時代初期の大名は、このころ成立した江戸幕府と主従関係を結んでいた。江戸幕府を頂点とする諸藩という形がとられ、幕府によって武家諸法度などの決まりが制定され、裏切り行為や戦はほとんど起こらなくなった。そのため、各大名は与えられた領国の政治を行ったよって、大名はこの間に主な仕事に変化したといえる。

二つ目は、領地の面積の表し方が貫高制から石高制になった点である。応仁の乱期には、貫高制を用いて領地面積を示していた。貫高とは、貨幣の単位である貫文(かんもん)(貫)に換算された年貢収納高を土地面積の基準としたもの⁴である。しかし、その貫文という単位は価格変動があり、基準があやふやだった。一方、江戸時代初期には石高制を用いて土地の生産力を示していた。石高とは、米穀の収穫高を基準とした土地生産高の表示法⁵である。また、中村は次のように述べている。

より正確にするためには、貫文というような価格変動のある基準でなく、ずばり米の生産量を基準にした方がいい。そこで貫高と収量(石高)と並存しはじめ、やがて秀吉によって石高に統一される。

⁴ 『百科事典マイペディア』1995.8,平凡社

⁵ 『旺文社日本史事典 三訂版』2000.10,旺文社

中村の論述から、豊臣秀吉が天下統一をした安土桃山時代に、貫高のデメリットを補うために石高が使われたと分かる。よって、この間に武家の領地の面積の表し方が変化したといえる。

三つ目は、武家の領地で重要視されるのが「土地と人（農民）の共同体」から「石高」になった点である。応仁の乱期に武家が支配していたのは、土地と人が一定数で構成されている共同体で、その共同体の数が重要だった。一方、江戸時代初期には、石高を示すために田畑一枚ずつの土地面積、収量、作人を明らかにする「検地」を行う必要があったから、一体としての共同体の土地と農民は解体された。すると、武家にとっては、領地の百姓の数よりも米の収量が重要になり、一所に居なくてもよくなった。そのため、転封、加封、削封をさせたり、飛び地を持ったりすることが可能になった。よって、この間に武家の領地の持ち方が変化したといえる。

四つ目は、武家の家による家格が出来た点である。応仁の乱期は、共同体の首長から順次に積み上げられた、ピラミッド型の上下の土地給付につられ、上下に主従関係が結ばれた。一方、江戸時代初期には、石高制によって大名が家臣に与えるのは土地そのものではなく石高になっていた。そのため、土地の分割と再分割という上下はできないから、大名は各家臣に直接石高を与えた。だから家臣の大小は量の大小であった。すると、土地の分割、再分割による上下の代わりが必要になったため、石高の大小が家の格の上下として固定された。よって、この間に武家の主従関係の上下の決め方が変化したし、それによって家格が固定されたといえる。

以上から、武家社会は「大名の仕事」「武家の領地の面積の表し方」「領地の持ち方」「家格の固定」の大きく4つの点で応仁の乱(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に変化したと言える。

3. 結論

3.1. 総括

本稿の検討を要約する。第一に、城郭建築では応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に「通し柱の使用による建築の高層化」「殿舎建築での床の間・身分をわける間取り」「築城時の分業化」という大きく3つの点で変化したことが明らかになった。第二に、民家系の建築では応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に「通し柱の使用による町屋の高層化」「農民住居の床座の様式」の大きく2つの点で変化したことが明らかになった。第三に、武家社会では応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の間に「大名の仕事」「武家の領地の面積の表し方」「領地の持ち方」「家格の固定」の大きく4つの点で変化したことが明らかになった。

よって、「民家系の建築技術は、安土桃山時代の城郭建築の加工技術向上に影響を受けたのではないか？」という問いに対して、1つの点でそうだといえる。大名が転封、加封、削封をさせられたり、飛び地を持ったりして新しい領地を統治することになっても、在地の民に権力を示すために通し柱を使用して城郭建築を高層化させたことで、民家である町屋も通し柱を使って一階建てから二階建てになった点である。

3.2. 残された課題と今後の展望

本稿では、城郭建築や民家系の建築の応仁の乱期(1400年代後半)から江戸時代初期(1600年代前半)の変化を文献から得た成果を基に考察することができたが、建築の構造学的な面からの調査が不十分であったため、構造学的な面からの調査もしてみたいと考える。

4. 参考文献

- ・西ヶ谷恭弘『城郭』1988.3, 近藤出版社
- ・三浦正幸『お城のすべて』2010.7, 学研雑学百科
- ・香川元太郎『オールカラー徹底図解 日本の城』2018.12, 学研プラス
- ・平井聖『改訂版 図説 日本住宅の歴史』2021.11, 学芸出版社
- ・株式会社 TAKAYASU「民家の歴史―庶民の住居変化―」『LIQ』2022.5.23,
<https://www.liq-takayasu.com/blog/28>, 株式会社 TAKAYASU[2022年12月31日閲覧]
- ・日本民俗建築学会『図説 日本民俗建築大事典』2001.11, 柏書房株式会社
- ・中村吉治『武家の歴史』1967.6, 岩波書店